

## The Translator of the *Asheshi wan jing* 阿闍世王經 (T626)

Tenshō MIYAZAKI

The identities of the translators of almost all the Chinese sutras have until now been estimated from descriptions in the Chinese catalogues. However, as pointed out by previous studies, in order to clarify the actual translator and the circumstances of the translation, the style and terminology of each text must be closely investigated. In this respect this article concerns evaluations of the *Asheshi wan jing* 阿闍世王經 (T626: *AWJ*), which the Chinese catalogues unanimously purport to have been translated by Lokakṣema 支婁迦識.

First of all, a review of the descriptions of this sutra in the Chinese catalogues shows almost identical descriptions are given in these records, which seem to succeed to that in the *Chu sanzang jiji* 出三藏記集 (T2145: *CSJJ*). The *CSJJ* attributes the *AWJ* to Lokakṣema based solely on Dao'an's 道安 presumption.

Secondly, however, an evaluation of the style of the *AWJ* in comparison with that of other of Lokakṣema's translations reveals that the *AWJ* has two notable features; ① it includes the opening formula, "Thus have I heard once..." 聞如是一時, and ② includes more than one inserted note. Each of these features is unusual for Lokakṣema's translations. However, among Lokakṣema's translations only the *AWJ* and the *Dun zhentuoluo suowen rulai sanmei jing* 侖眞陀羅所問如來三昧經 (T624: *DZJ*) contain both.

Third, and lastly, the *AWJ*, when compared with the *Daoxing banruo jing* 道行般若經 (T214) in the same manner taken in Harrison[1993], shows general agreement in terminology with some exceptions. These exceptions are remarkable in terms, first, that they are shared only between the *AWJ* and the *DZJ*, and second, that they are not the terminologies usually regarded as common to Lokakṣema's translations. Thus it can be surmised that the *AWJ* and the *DZJ* must have been rendered into Chinese in close circumstances.

## 『阿闍世王經』(T626)の漢訳者について

宮崎 展昌

## 1 はじめに — 研究の目的と方法 —

『阿闍世王經』(T626, 以下、この漢訳経典を指す場合は『阿闍世』と略称)は、\**Ajātaśatru-kaukṛtyavinodanāsūtra* (以下、『阿闍世王經』一般を指す場合はAjKVと略称)の現存する漢訳完本3本のうち、最も古いものとして知られている。従来、その訳者は主に経録の記述に基づいて支婁迦讖(\*Lokakṣema, 以下、支讖と略称)と考えられ、その訳語などの翻訳上の特徴に注意が払われることはなかった。しかし、先行諸研究が指摘するように、単に経録の記述のみに従って、訳語などの翻訳上の特徴を検討することがなければ、その経典の翻訳の由来や翻訳状況について明らかにしたとは言えない<sup>1</sup>。

そこで本稿では、従来ほとんど省みられることのなかった『阿闍世』の翻訳上の特徴を詳細に調査・検討し、同経の翻訳者や翻訳状況について考察を加えることを目的とする。ここで言う「翻訳者や翻訳状況についての考察」というのは、本経の翻訳者が、支讖か否か、さらに支讖以外である場合に誰を本経の翻訳者として推定するということのみを指すのではなく、『阿闍世』が置かれたであろう翻訳状況について知るためにも、現存する漢訳経典、特に古訳の中でどの経典と近似性や類似性を見出すことができるかどうかということまで含めて調査・検討することを指す。

その方法としては、現時点では支讖訳であることに疑いないとされる『道行般若經』(T224, 以下『道行』と略称)と『阿闍世』の間での訳語に関する比較(第5節)を中心に据えつつ、経録の記述の確認(第3節)や、訳語以外の形式上の特徴についての検討(第4節)を併せて行い、総合的に『阿闍世』の翻訳上の特徴について調査・検討する。ただし、膨大な漢訳経典全体にまで対象を広げて比較・検討をすることは困難であるので、支讖訳とされる経典群と比較することに重きを置くこととした。

## 2 支讖の訳経

『阿闍世』個別の検討に入る前に、本稿において『阿闍世』と比較されるべき、先行研究の中で支讖の翻訳とされている経典群について簡単に見直しておく。

支讖は、安世高と並んで後漢代に活躍した最初期の訳経者で、もっぱら大乘経典を翻訳したとされる。平川[1989]、Zürcher[1992]、Harrison[1993]などの主な先行研究によると、およそ、下記の9経が現存する支讖の訳経として認められている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 河野[2006]は「経録研究と訳経研究」に関して、いみじくも次のように述べている。

経録それぞれには編纂された時代的な特徴と地域的な限界があり、さらに編集方針の違いもあるため、経録上で経典の由来について確認することは学的には必要不可欠な手続きであるとしても、経録上の記述を楯に経録の記載内容に執心することは避けなければならない。(中略)ここで取り得る方法として、経録研究を従としながら、各時代の訳者の訳出経典及び各時代の訳経に存する特徴の究明を主とする研究方法が最良のものであると結論できる。(河野[2006] p.41)

<sup>2</sup> ちなみに現在の大正蔵では上記9経の他に『雜譬喻經』(T204)『無量清淨平等覺經』(T361)一卷本『般舟三昧經』(T417)の3経が支讖訳とされている。

T224 道行般若經	T350 遺日摩尼寶經	T624 佉真陀羅所問如來三昧經
T280 兜沙經	T418 般舟三昧經	T626 阿闍世王經
T313 阿闍佛國經	T458 文殊師利問菩薩署經	T807 内藏百寶經

以上の經典が先行研究によって支識訳とされるのは、最古の経録とされる『出三蔵記集』(T2145. 以下『祐録』と略称)の記述(T2145 6b-c)によるところが大きい<sup>3</sup>。

ところが上記の經典のうち、いくつかについては支識訳であることに関して問題点が既に指摘されている。すなわち、『阿闍佛國經』(T313. 以下『阿闍』と略称)については、Harrison [1993]などで、訳語の特徴などから支識訳であることは非常に疑わしいことが指摘されている。また、三卷本『般舟三昧經』(T418. 以下『般舟』と略称)については、Harrison [1990]は、訳語や経録に関する詳細な検討・考察から、高麗版の『般舟』散文部分の前半部(第六品まで)が支識のオリジナルまでさかのぼることができる可能性が高いが、散文部分の後半部や偈頌部分は支識の弟子たちの手によるものである可能性が高いとする。

次に、『佉真陀羅所問如來三昧經』(T624. 以下『佉真』と略称)については諸学者の間で意見が割れている。まず国内では、平川 [1989]によると、境野黄洋氏が「真陀羅」という訳語を問題視して、同経を支識訳ではなしに、竺法護訳としたのに対し、常盤大定・林屋友次郎両氏は、『祐録』中の支敏度作「合首楞嚴經記」の記述を支持し、同経が支識訳であるとし、平川氏も後者の説を認めている。一方、近年の海外では、Zürcher [1992]は『祐録』での記述の乱れを理由に同経を支識訳とすることに疑問を呈しているが、Harrison [1993]は常磐・林屋両氏同様、支敏度の記述を重んじて、同経に後世の手が加わっている可能性を認めつつ、支識訳としている。現在では『佉真』は支識訳としておおよそ認められているようであるが、過去にこうした議論があったことから、『佉真』の漢訳者については注意を払う必要がある。

一方、上記で掲げたもの以外については、『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』(T362)は大正蔵では支謙訳とされているが、近年では支識の訳経として考えられるようになってきている<sup>4</sup>。また、Nattier [2005]は、『諸菩薩求佛本業經』(T282)と『菩薩十住行道品』(T283)の二經典が<sup>5</sup>、『兜沙經』(T280)との関わりや訳語などの翻訳上の特徴から、支識の翻訳である可能性を指摘している。

上記のように、従来、経録の記述に基づいて支識訳として認められている經典の中にも支識訳であることに問題点が指摘されているものがいくつかあることを確認した<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> 『祐録』では上記9經典を含む、計14の典籍を支識の訳経として列挙している。上記以外には『祐録』編纂時に既に失われていたと考えられる「首楞嚴經二卷」などが挙げられている。

<sup>4</sup> Harrison [1998] pp.556-557 参照。

<sup>5</sup> 本稿で扱う『阿闍世』の漢訳者に関して疑義を呈しているのは、管見の及ぶ限りではNattier [2006]の脚注10においてのみである。Nattier氏は、上記の支識訳経とされる9經典のうち、『佉真』と併せて2経を“borderline texts”として分類し、純粋な支識訳として扱うことを躊躇している。この見解は、2005年度に開講された東京大学大学院の講義において、氏が既に示されたもので、筆者はそこから学ぶものが多かったことをここに記すことで、感謝の意を表する。なお、氏はこれら2経に関して「どうやら修正されたようである (have apparently been revised)」という見込みを示しておられる。

## 3 経録の記述

『阿闍世』に関する諸経録の記述はほぼ一定しており、これは現存する最古の経録である『祐録』の記述をそれ以降の経録が受け継いだからである、と考えられる<sup>6</sup>。

そこで本節では『祐録』での『阿闍世』に関する記述を整理し、確認しておく。

- ① 阿闍世王經二卷 安公云出長阿含  
舊録阿闍世經 (T2145 6b16)
- ② 其古品以下至内藏百品凡九經。安公云：似支識出也 (do. 6b26–27)
- ③ 有阿闍世王寶積等十部經。以歲久無録。安公按練古今精尋文體云：似識所出。(do. 95c27–29)
- ④ 今之小品、阿闍世、屯眞、般舟、悉識所出也。(do. 49a20–21)

①は支識の訳経を列举する箇所での記述で、経名・巻数ともに現存のものとも一致する<sup>7</sup>。②と③によると、僧祐は、道安の比定に基づいて『阿闍世』を支識と記載したと考えられる。④は支敏度作「合首楞嚴經記」における記述であるが、これによれば、支敏度は『道行』『侏眞』『般舟』と並んで『阿闍世』を支識として考えていたようである<sup>8</sup>。

このように『祐録』では、一貫して『阿闍世』を支識の訳経として記述し、それを他の経録が受け継いだのであろう。だが、第1節で触れたように、経録の記述は参考にするべきものではあるが、それだけでは経典の翻訳者や翻訳の由来を明らかにしたとは言えず、次節以降に見るように、『阿闍世』本文の翻訳上の特徴を明らかにする必要がある。

また、『阿闍世』の異訳に関しては、『祐録』では、現存する竺法護訳『文殊師利普超三昧經』(T627. 以下『普超經』と略称)の他に、同じく竺法護訳として「更出阿闍世王經二卷」という記述があるが、これは『普超經』の別名を誤記したものと思われ、その実在は疑わしい<sup>9</sup>。また、『歴代三寶紀』(T2034)では、別の経録の記述に基づいて、この他にも安法欽訳「阿闍世王經二卷」、鳩摩羅什訳「阿闍世經二卷」を挙げているが、同じくその実在は疑わしい<sup>10</sup>。

<sup>6</sup> 本来、諸経録の記載内容を列举し、検討すべきところであるが、既に村上[1994]で列举・検討されているので、ここでは諸経録が元にしたであろう『祐録』の記述を確認するにとどめる。ただし、静泰撰『衆經目錄』(T2148)では、『阿闍世』など数経が「支謙」訳として記されているが(T2148 184a14, 189b9, 190a7, 190a18)、これは伝承過程で起きた誤りか単なる誤植と考えられ、「支識」と訂正されるべきであろう。

<sup>7</sup> 割注にある「安公云出長阿含」という記述は道安の誤解と推測される。村上[1994]参照。

<sup>8</sup> Harrison[1993]は④の記述を取り上げ、『阿闍世』が支識であることの証左の一つであるとする。

<sup>9</sup> 具体的には『祐録』では以下のような記述となっている。

- 普超經四卷 一名阿闍世王品安録亦云更出阿闍世王經或爲三卷  
舊録云文殊普超三昧經太康七年十二月二十七日出 (T2145 7b25–26)
- 更出阿闍世王經二卷 (do. 9a28)

この『祐録』中の「更出阿闍世王經」は、『法經録』(T2146)に連なる系統の諸経録には採用されていないが、それらとは別系統の『歴代三寶紀』(T2034)を受ける系統の諸経録はそれをすべて採用している。

<sup>10</sup> 『歴代三寶紀』での記述は以下の通り。

- 阿闍世王經二卷 太康年譯。見竺  
道祖晋世雜録 (T2034 65a17)
- 阿闍世經二卷 見別  
録 (do. 78a4)

これらの記述は『三寶紀』を受ける系統の諸経録にも受け継がれている。

## 4 形式上の特徴

訳語に関する詳細な検討に入る前に、訳語以外の『阿闍世』の形式上の特徴について見ておく。具体的には、句作り、偈頌・割注・冒頭句の有無などについて、他の支識訳経とされる経典と比較しながら見ていく。

■句作り 後代の漢訳経典では一般的に四字もしくは二字ごとの句作りがなされるが、支識訳とされる経典では四字、二字に基づかない不規則な句作りがなされ、『阿闍世』にも同様の特徴が見られる。

■偈頌の有無 支識の訳経とされる経典は、『般舟』(T418)を除いて、対応する異訳経典で偈頌が見られる場合でも、全文が長行で構成されるが、『阿闍世』も同様の特徴をそなえる。また、偈頌が見られる『般舟』については、Harrison [1990] で明らかにされているように、偈頌部分は後代の付加とされる。

■冒頭句 『阿闍世』には *evam mayā śrutam ekasmin samaye* に相当する冒頭句「聞如是一時」が見られる。これは支識訳とされる経典のうち、第2節で見たように疑義や問題点があるとされる『阿闍』『般舟』(異本)<sup>11</sup>、そして『佉真』と共通した特徴である。その他の支識訳経には冒頭句は見られない。

■割注 支識訳経で割注をそなえたものは『兜沙経』『阿闍』『佉真』と『阿闍世』の4経のみであり、複数の割注が見られるのは後二経典である。『阿闍世』では、音訳語で表記された固有名に漢語を施す割注がもっぱら見られ、『佉真』では法数を数える割注とともに、『阿闍世』同様、音訳語を漢語で表記する割注が複数確認される<sup>12</sup>。

また、割注が付加された状況が問題となるが、音訳された固有名詞のごく一部のみにしか割注が施されていないことや、割注の中に後代の訳経中に確認される漢語が見られることなどから、<sup>13</sup>『阿闍世』の翻訳者と割注を付加した人物が同一であるという可能性はかなり低いと考えられる。つまり、割注は翻訳者とは異なる人物もしくはグループによって付けられたと推測できるが、その具体的状況を考察する上で参照すべき、以下のような事例が見られた。

- 刹土名曰<sup>漢</sup>濕呵沙<sup>漢</sup>彌阿沙者<sup>漢</sup>天竺語<sup>漢</sup>其佛號<sup>漢</sup>荼毘羅耶<sup>漢</sup>漢曰<sup>漢</sup>光<sup>漢</sup>明王 (T626 393a1-2)
- 到<sup>漢</sup>明開闢<sup>漢</sup>刹土、乃至<sup>漢</sup>荼毘羅耶佛所<sup>漢</sup>前作禮 (中略) 各各自見<sup>漢</sup>光明王佛<sup>漢</sup>邊有侍者 (T626 393b7-12)

<sup>11</sup> 『般舟』の宋・元・明版には「聞如是一時」以下の定型表現が見られる (T418 902c24 n.4)。Harrison [1990] は冒頭句のみならず『般舟』全体の分析を通して、宋・元・明三本の版本は高麗版に比べて後世の加筆・訂正の影響が大きいとし、高麗版の方がより原型を保っている、と推測している。

<sup>12</sup> 一例ずつしか割注が確認されなかった『兜沙経』と『阿闍』については、前者では「須臾<sup>音</sup>武<sup>武</sup>」(T280 446a29) というように「読み方」を示した割注が見られ、後者では「號曰<sup>漢</sup>蓋洹那洹波頭摩<sup>漢</sup>言<sup>漢</sup>金<sup>漢</sup>色<sup>漢</sup>蓮華」(T313 760b29-c1) というふうに、上記の両経と同じように、音訳語を漢語で示した割注が見られる。

<sup>13</sup> 具体的には「嚴淨」(T626 404b6) という言葉がそれに当たるが、この言葉は『阿闍』では複数回確認される言葉である。既に触れたように『阿闍』は支識訳が疑問視されている経典であり、おそらくはこの言葉もその根拠の一つとなりうるものであろう。ちなみに、『佉真』で「迦羅蜜」という語に付けられた「善友」(T626 360a14) という漢語は、他の支識訳には見当たらず、支謙や竺法護などの少し時代を下った訳経の中に見いだすことができるものである。

この事例は割注内で示された漢語がそれ以降の本文中でも使用される用例である。これから導き出される可能性としては、一つは割注が付加された際に本文も書き換えられたというものであり、もう一つは本文の訳語を参照しながら割注が付加されたというものである。

以上、形式上の特徴に関して、『阿闍世』とその他の支識訳の經典を比較しながら見てきたが、まとめると以下ようになる。

- I 四字もしくは二字の句作りになっていない。
- II 異訳経には偈頌が見受けられるのに、全文が長行よりなる。
- III 冒頭句(「聞如是一時」)が見られる。
- IV 音訳語に対して漢語を示す割注が複数確認される。

I, IIの二つは他の支識訳と共通するものであるが、IIIは支識訳であることに疑義、もしくは問題がある3經典と共通する特徴であり、IVは『佉眞』とのみ共通する特徴である。

## 5 訳語に関する調査・検討

### 5.1 訳語の検討方法

本節では『阿闍世』の訳語に関して詳細に検討していくが、まずその方法に関して述べておく。

『阿闍世』に関する訳語の検討は村上 [1994] においても既に行われているが、その目的は第3節でも触れた、経名が経録にしか確認できない經典と、伝承上で何らかの混同がなかった否かを調べるための限定的なものであり、十分な調査とは言えない<sup>14</sup>。その最も大きな問題点は、『阿闍世』中の「特殊な訳語」のみを検討しているという点にある。この方法では、一般的な訳語でありながら、他の支識経では見られないような、『阿闍世』中の訳語が検討されることはない。また、原語や他訳の対応語の比定に際しては少なからず誤りも含まれ、残念ながら、不十分なものであると言わざるを得ない<sup>15</sup>。

そこで本稿では、『阿闍世』と同じく、サンスクリット語完本は失われているがチベット語訳完本が現存する『般舟』の訳語に関して検討した、Harrison [1990] が採用した方法を広く適用して、より詳細に『阿闍世』の訳語を検討することにする。すなわち、支識訳が確実視されている『道行』に対応する *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā* (以下、AsPと略称) とチベット語訳 AjKV との間に共通する術語に関して、それに対応する漢訳語を『道行』と『阿闍世』の間で比較検討する。その際に、Harrison [1990] 同様、AsPと共通する術語については、AjKVのものはチベット語訳より還梵したものを用いる。

また、本稿では Harrison [1990] にはない独自の方法として、『道行』と『阿闍世』の

<sup>14</sup> 具体的に村上 [1994] では、支識訳が確実視されている『道行』と竺法護訳『普超經』(T627)と鳩摩羅什訳『小品般若經』(T227)と、そして『阿闍世』との間で訳語の比較検討を行っている。

<sup>15</sup> 「一般的な訳語でありながら、他の支識経では見られないような」訳語とは、具体的には「發菩薩意」「一切智」などがあるが(次項(25)(35)参照)、村上 [1994] はそれらを問題にしていない。また、『阿闍世』中の「無極慧」の原語を、「慧度無極」から類推したのか、*prajñāpāramitā* と比定したり、実際は『道行』中に見出せる言葉(「婬怒癡」*rāga-dveṣa-moha*、「一心」*dhyāna*、「無央數」*asaṅkhyeya* など)も見逃している。

間で訳語が共通しなかった場合、『阿闍世』の訳語に関して、① 支識訳とされるその他の経典、② 比較的時代が近接すると考えられる、竺法護あたりまでの古訳経典、③ その他の漢訳経典すべてという順で調査し、その訳語がおよそどのあたりの時代の訳経に多く見られるかを併せて検討していく。

調査結果を先取りしておく、上記の方法で検討した結果、『阿闍世』と『道行』の間で共通する訳語が数多く見られる一方、両経間で相違する訳語も少なからず見られることが明らかになった。さらに、上記のように、『阿闍世』中の「相違する訳語」に関して調査をした結果、前節のⅢとⅣに関して『阿闍世』と共通する形式上の特徴を有することが明らかになった『佉眞』との間にいくつかの共通する訳語を見出すことができた。よって、『阿闍世』と『道行』の間で訳語が共通しなかった場合は、便宜上、『佉眞』の訳語も並列して表記した。

## 5.2 訳語の調査・検討

具体的に訳語の調査・検討を始めるが、最初に以下の表記について断っておく。

- 『阿闍世』と『道行』の両経で共通する訳語は**強調書体**で表記する。また、『阿闍世』『道行』の両経間で相違する訳語で、『阿闍世』と『佉眞』間でのみ共通するものには下線を施す。また、後の表に取り上げる『阿闍世』の訳語には右肩にはタガー(†)を付す。
- 便宜上、大正蔵の記載に基づいて諸経典の訳者を併記するが、経録の記述等により、それに疑義がある場合は訳者名の右肩にアスタリスク(\*)を施す。
- 以下の訳語を示す表では、『道行』『阿闍世』『佉眞』はそれぞれ〈T224〉〈T626〉〈T624〉と大正蔵の経典番号で略記する。

### (1) *anuttarā samyak-sambodhiḥ*

阿耨多羅三耶三菩 (T224 437b24, 437c1, etc./T626 394a19ff, 402c27, 404c7ff/T624 364a29, 364c17, etc.)

〈T626〉「阿耨多羅三耶三菩心」(404a24ff) 「阿耨多羅三藐三菩提心」(391c28) 「無上平等道意†」(391b26)

〈T624〉「阿耨多羅三耶三菩提」(351b6, 361b11ff, 363b14ff, etc.) 「阿耨多羅三藐三菩提」(352a3, 359b6ff, etc.) 「阿耨多羅」(361b15ff)

3 経の間では「阿耨多羅三耶三菩」という音訳語を確認することができた。ただし、『道行』では音訳語として「阿耨多羅三耶三菩」がもっぱら確認されたのに対し、『阿闍世』『佉眞』にはそれぞれ『道行』には見られない訳語が確認される<sup>16</sup>。特に、『阿闍世』で確認された「無上平等道意」という意識語は、支識訳経ではこの一例のみであり、後世の訳経においても用例が限定されている<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> 『佉眞』でも「阿耨多羅三耶三菩(提)心」の用例は確認されたが、いずれも「發~心」での用例であったので、*sambodhau cittam ut√pad* を訳出したものと判断した。ただし、『阿闍世』中では「發~心」以外の用例も確認できたので上記のように表記した。

<sup>17</sup> 「無上平等道意」が確認される訳経は、竺佛念訳の3 経典『最勝問菩薩十住除垢斷結經』(T309) 『菩薩從兜術天降神母胎說廣普經』(T384) 『菩薩瓔珞經』(T656) と法盛\*訳『菩薩投身餓虎起塔因緣

また、*anuttarām samyak-saṃbodhim abhisambuddhaḥ* の音訳語として『道行』で確認できる「阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛」は漢訳經典全体で見た場合も用例に限られるので<sup>18</sup>、支識に特徴的な音訳語の一つと考えられるが、『阿闍世』『侘眞』の2経には確認できなかった。

(2) *anupattika-dharma-kṣānti*

〈T224〉「無所從生法樂」(451a14, 453c1, etc.)

〈T626〉「無所從生法忍<sup>†</sup>」(391b25, 392c18, 404b9ff)

「無所從生法樂忍<sup>†</sup>」(406a29)

〈T624〉「無所從生法樂忍」(351a23, 351b7ff, 352c19, 359b7, etc.)

「無所從生法忍」(366a6ff, 367a29) 「無所從生法樂」(366a25)

『道行』『侘眞』で確認される「無所從生法樂」は『般舟』(T418)『内蔵百寶經』(T807)でも確認されるが、用例は限定的で、支識の訳経に特徴的な訳語の一つと考えられる<sup>19</sup>。一方、『阿闍世』『侘眞』で確認された「無所從生法忍」「無所從生法樂忍」の二語は他の支識訳では見られない訳語であり、そのうち、「無所從生法忍」は竺法護訳など後世の訳経に広く見られる訳語である。また「無所從生法樂忍」は、上記2経以外では、漢訳經典全体でも、竺佛念・曇摩婢訳『摩訶般若鈔經』(T226. 以下『鈔經』)や翔公訳『濡首菩薩無上清淨分衛經』(T234)の2経に、それぞれ3箇所でのみ確認できる、かなり稀な訳語である<sup>20</sup>。

(3) *avaivartika*

阿惟越致 (T224 426a4ff, 426c21ff, etc./T626 397a8ff, 398b24ff, etc.)

(4) *asura*

阿須倫 (T224 432a3, 433b17ff, etc./T626 397b6, 405c25)<sup>21</sup>

(5) *upāyakaūsalya*

漚怛(和)拘舍羅 (T224 433c7, 438a11, etc./T626 391a14, 399c21, 400b19)<sup>22</sup>

(6) *kalyāṇa-mitra*

〈T224〉「善知識」(452b3ff, 455c15, 460b3ff, etc.) 「善師」(427a27ff, 438b13, etc.)

〈T626〉「迦羅蜜<sup>†</sup>」(394b19)

〈T624〉「迦羅蜜」(360a14)

『阿闍世』での「迦羅蜜」は、諸異訳に対応語は見られないが、原語は *kalyāṇa-mitra* と

經』(T172) 竺法護訳『佛說過去世佛分衛經』(T180) 支謙訳『佛說申日經』(T535) の計6經典のみ、支謙訳経などで広く見られる「無上正真道意」の方がより一般的な訳語であろう。

<sup>18</sup> 具体的には支識訳『般舟』と、『道行』の影響を受けていると考えられる般若経系の經典(『光讚經』や『摩訶般若鈔經』など)と安法欽\*訳『道神足無極變化經』(T816)などである。

<sup>19</sup> 支識訳以外では、『道行』の影響を受けているとされる、支謙訳『大明度經』(T225)に複数回確認される他は、支謙訳『菩薩生地經』(T533) 智嚴訳『佛說法華三昧經』(T269)にそれぞれ一例ずつ確認されるのみである。

<sup>20</sup> ただし、「無所從生法樂之忍」という訳語も以下の3経に一例ずつ確認できる。竺法護訳『等目菩薩經』(T288) 白法祖\*訳『佛說菩薩修行經』(T330) 竺法護訳『佛說弘道廣顯三昧經』(T635)。

<sup>21</sup> 『阿闍世』に「阿須輪」(T626 389a13)という用例があるが、異訳から「阿須倫」とすべきであろう。

<sup>22</sup> 『阿闍世』に「羅」が落ちた形で「漚怛拘舍」(404b26)という用例があるが、単に書写上の間違いである可能性が高い。



見なして差し支えないであろう。「迦(加)羅蜜」という音訳語は、支識訳では上記2  
 經典以外には『文殊師利問菩薩署經』(T458, 以下『問署經』)でも確認できたが、漢訳  
 經典全体で見たときには、上記の他には轟道真\*訳『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T483)の  
 みで確認される、非常に稀な音訳語である。

(7) *kinnara*

〈T224〉「甄陀羅」(434c29, 435b1, 438c12, 475b18)

〈T626〉「眞陀羅<sup>†</sup>」(389a13, 397b7, 398a18)

〈T624〉「眞陀羅」(349b10, 351c3ff, etc.)

『般舟』(散文)で「甄多羅」の用例が確認されるが、支識訳経の中で「甄陀羅」と造る  
 のは『道行』のみである。「眞陀羅」は支識訳経では『阿閼』『般舟』(散・偈)でも確  
 認される。また、両語とも後世の訳経で確認される。

(8) *gaṅgā-nādī-vāluka*

恒邊沙 (T224 430c17, 433a22ff, etc./T626 393a21ff, 400b16ff, etc.)

(9) *gandharva*

捷陀羅 (T224 475b17/T626 389a13, 398a17, 406b8)

〈T224〉「乾陀羅」(435a1)「健陀羅」(438c12)

(10) *garuḍa*

〈T224〉「迦樓羅」(434c29, 438c12)「迦留勒」(475b18)

〈T626〉「迦留羅<sup>†</sup>」(389a13, 397b6)

〈T624〉「迦留羅」(349b11)

『道行』の「迦樓羅」は支識訳では『般舟』(散文)で一例確認されるが、「迦留勒」に  
 ついては漢訳經典全体でもこの用例のみである。『阿闍世』の「迦留羅」は、『佉眞』ほ  
 か『阿閼』『般舟』(散文)でも確認される。

(11) *cakravartī(-rājan)*

遮迦越羅 (T224 447b7ff, 465a21, 477a2, etc./T626 393b23, 395a12, 404c13)

〈T224〉「遮迦越王」(451a19)

〈T626〉「金輪王<sup>†</sup>」(390b23)

「金輪王」の用例は支識訳では『阿闍世』のみであったが、漢代の訳経中では支謙訳に  
 も用例が確認される<sup>23</sup>。

(12) *Jambudvīpa*

閻浮利 (T224 432a26ff, 434a17, 435c1ff, etc./T626 405c6)

(13) *tathatā*

本無 (T224 449c29ff, 453a28ff, etc./T626 400c7, 401a9ff)

〈T626〉「怛薩阿竭<sup>†</sup>」(392b8ff, 392c2ff, 398c27)

〈T624〉「怛薩阿竭」(366a21)「怛薩」(349c13ff, 362c21)

『阿闍世』『佉眞』では、一般に *tathāgata* の音訳語として知られる「怛薩阿竭」が *tathatā*

<sup>23</sup> 具体的には支謙訳『義足經』(T198)同訳『大明度經』(T225)である。また、義浄訳『根本説一切  
 有部毘奈耶破僧事』(T1450)などの後世の訳経にも多数の用例が確認される。

に対応する箇所に見られる<sup>24</sup>。また、『佉真』では *tathatā* の音訳と考えられる、「恒薩」が見られた<sup>25</sup>。

(14) *tathāgata*

恒薩阿闍 (T224 429a29, 430c17ff, etc./T626 391c3, 393a24, 393c9ff, etc.)

如來 (T224 450b3, 453b23/T626 391b28, 391c13)

3 経共に音訳語である「恒薩阿闍」の用例のほうが圧倒的に多く、「如來」の用例は上記のみに限られる<sup>26</sup>。また、*tathāgata-arhat-samyaksambuddha* の音訳語として『道行』をはじめ支識訳のいくつかには「恒薩阿闍阿羅呵三耶三佛」が多数確認される。この訳語は他の經典にはそれほど多く確認されないので支識訳の特徴的な訳語の一つであると考えられるが、『阿闍世』には確認できなかった<sup>27</sup>。

(15) *Tuṣiṭa-deva*

兜術天 (T224 439c6, 451b21, etc./T626 389a24, 394b16, 405a6, 405c20)

(16) *Trayastrīṃśa-deva*

仞利天 (T224 430a25, 431a21, etc./T626 390c26, 404a17)

(17) *dāna, śīla, kṣānti, vīrya, dhyāna, prajñā*

〈T224〉「檀・尸・羶提・惟逮・禪・般若」(434b3ff etc.)

「布施・持戒・忍辱・精進・一心 (or 禪, 禪定) ・智慧」(434b8ff etc.)

<sup>24</sup> 『阿闍世』の用例うち、一例を異訳と対照しておく。ただし法天訳『未曾有正法經』(T628) に関しては対応関係がはっきりしないので省略する。

〈AJKV〉 *smras pa / 'jam dpal de bzhin nyid la ni las kyang ma mchis / rnam par smin pa yang ma mchis / 'gro ba yang ma mchis so // smras pa* <sup>i)</sup> *rigs kyi bu ji ltar de bzhin nyid la las kyang med / rnam par smin pa yang* <sup>ii)</sup> *med / 'gro pa yang* <sup>iii)</sup> *med pa ltar las kyi rnam par smin pa'i 'gro ba yang* <sup>iv)</sup> *de bzhin du shes par bya'o // las kyi rnam par smin pa'i 'gro ba ni 'ong ba med pa can / 'gro ba med pa can yin te / de bzhin nyid* <sup>v)</sup> *kyi 'gros las 'da' bar mi 'gyur ro //* (北京版 (P) No.882 232a3–5/sTog 宮版 (S) No.223 281b4–6)

<sup>i)</sup> *pa /* P: *pa* <sup>ii)</sup> *pa yang* ] S: *pa'ng* <sup>iii)</sup> *pa yang* ] S: *pa'ng* <sup>iv)</sup> *ba yang* ] S: *ba'ng* <sup>v)</sup> *de bzhin nyid* ] S: *de ni de bzhin nyid*

〈T626〉復問：恒薩阿闍者無作、無罪、無得，是三事何緣與等？文殊師利言：恒薩阿闍無作、無罪、無得。其作、其罪、其得如所爲，以故等。其罪以過了不見罪已過當來，亦不離恒薩阿闍，故說。(329b8–11)

〈T627〉又問：軟首，其如無本者亦無有作、無有報應、無有往趣？答曰：如族姓子，如無本者，亦無所作、亦無報應、亦無往趣。所作、報應、往趣、亦然。無來無去，所作、報應、所往至處，其如無本，無所歸趣。(410b22–27)

一方、『佉真』での用例は以下の通り。

〈DKP〉 *mi gyo ba'i tshul gyis chos thams cad yang dag pa'i mtha' la gnas par shes pa dang / dus sum nyam pa nyid pas chos thams cad de bzhin nyid la gnas par 'juk pa dang /* (Harrison [1992] §14D. 但し、DKP は \**Drumakinnararājaparipṛcchāsūtra* の略)

〈T624〉以往於本際，而知諸法。已住恒薩阿闍，於法無所不入，於三世而等。(366a20–21)

〈T625〉知一切法，住於實際，不動搖故。知一切法，住於如中，信三世法等。(387b23–24)

<sup>25</sup> 「恒薩」という語は他には安法欽\*訳『道神通足無極變化經』(T816) においてのみ確認できた。

<sup>26</sup> 『阿闍』では専ら「如來」の語が用いられており、それが『阿闍』が支識訳であることに疑義が呈されている根拠の一つとなっている。

<sup>27</sup> 具体的に『道行』以外の支識訳では、『般若舟』(3例)『問署經』(1例)の二經典で確認される。その他には般若經系の竺法護訳『光讚般若經』(T222)や『鈔經』(T226)と、竺法護\*訳『阿闍世王女阿術達菩薩』(T337)のみで確認できる。

〈T626〉「(所) 施與<sup>†</sup>・持戒 (or 戒)・忍辱・精進・一心・智慧」(390a9, 390b7, 391b10, etc.)

〈T624〉「檀・尸・羸提・精進・禪・般若」(356a28ff)

「布施 (or 施與)・持戒 (or 淨戒)・忍辱・精進・一心 (or 禪)・智慧」(354c22, 363c11, etc.)

『阿闍世』では『道行』『佉眞』で見られるように音訳されることは一度もなかった。また、『阿闍世』では「布施」という語が一度も使われない代わりに、*dāna* の訳語として「施與」もしくは「(所) 施與」という語が使われている。同様の用例が『佉眞』にも複数回確認できた。

(18) *Dīpamkara*

〈T224〉「提和竭羅」(431a7ff, 458b1ff, etc.)

〈T626〉「提和竭<sup>†</sup>」(394b12)「提愆竭」(405a22)

〈T624〉「提和竭」(366a6)

『阿闍世』『佉眞』共に、語末の「羅」が脱落した「提和竭」が見られる。ただし、上記の音訳語は、2語とも後世の訳経では稀な音訳語である。

(19) *dharmā-bhāṇaka*

〈T224〉「法師」(430a3ff, 435a2, etc.)「經師」(434c5, 451b13, etc.)

〈T626〉「明於經法」(393c29)「明經<sup>†</sup>」(394a3)

〈T624〉「明經」(350a13)

「明經」という訳語は支識訳経中では上記2經典のみであるが、安玄訳『法鏡經』(T322)や支謙や竺法護の訳経でも確認できる。

(20) *dhāraṇī*

陀隣尼 (T224 477a29/T626 397a23ff, etc.)

(21) *nirvāṇa*

泥洹 (T224 426b12ff, 429c2ff, etc./T626 389c20, 392c21, etc.)

(22) *pañca-abhijñā*

〈T224〉「般遮旬」(433b29ff, 436c18ff)

〈T626〉「五旬<sup>†</sup>」(391a13)<sup>28</sup>

〈T624〉「般遮旬」(358c27)「五旬」(353a3, 357c28, 364a29)

『道行』と『佉眞』で見られる「般遮旬」は、固有名詞を除き、漢訳經典全体で確認されるのはこの2經のみで、かなり特殊な音訳語と考えられる。「五旬」は、支識訳では『遺日摩尼寶經』(T350, 以下『摩尼寶』と略称)でも確認されるが、後世の訳経中では用例は限定的である<sup>29</sup>。

(23) *preta*

<sup>28</sup> 大正藏本文では「五旬」とされているが、異読から「五旬」と読むべきであるとする。異訳にも当該箇所が *pañca-abhijñā* に対応する訳語が確認される。

<sup>29</sup> 他に「五旬」が見られた經典は、具体的には竺法護訳の3經典『光讚經』(T222)『阿闍世王女阿術達菩薩經』(T337)『弘道廣顯三昧經』(T635)と『鈔經』(T226)求那跋摩訳『菩薩內戒經』(T1487)の計5經典のみである。

薜荔(荔) (T224 448a18, 464b6, etc./T626 402c2)<sup>30</sup>

(24) *buddha-anubhāvena*

承佛威神 (T224 443b16/T626 392b13, 393a8ff, 396a2)

〈T224〉「持佛威神」(425c12ff, 429a15ff, etc.)

2 経の間では「承佛威神」が共通して見られたものの、『道行』では上掲の一例しか確認されないのに対して、他の支識訳では特に『阿闍』で数多く確認され、後世の訳経でも広く確認される訳語である。一方、『道行』で複数確認された「持佛威神」は、支識訳経をはじめとする限定されたの經典に見られる訳語であり、支識訳に特徴的な訳語の一つと考えられるが、『阿闍世』には確認できなかった<sup>31</sup>。

(25) *bodhicittam ut√pad*

〈T224〉「索佛道」(432b6, 438a6)

〈T626〉「發菩薩心<sup>†</sup>」(395b1, 399c8)「發菩薩意<sup>†</sup>」(392c19)「發心」(390b24, 394b6)「發好心<sup>†</sup>」(390a14)

〈T624〉「發菩薩心」(359b24)「發心」(351a9, 363b1)

『阿闍世』と『侘眞』で確認された「發菩薩心」と、『阿闍世』で確認された「發菩薩意」の2語は他の支識訳経では確認できない一方、竺法護の訳経などには広く確認できる。また、「發心」の語は『道行』でも確認できたが、*bodhicittam ut√pad* と対応した箇所での用例ではなく、その他の支識訳では『摩尼寶』でも確認できる。「發好心」は漢訳經典全体でも3つの用例しか確認できない、稀な訳語である。<sup>32</sup>

(26) *bhūta-koṭi*

本際 (T224 442c6ff, 448b26, 458a9ff/T626 392c7)

(27) *mahāyāna*

摩訶衍 (T224 427c1ff, 429b6, 446b21/T626 389c5, 395b9, 406a26)

(28) *mahorāga*

〈T224〉「摩睺勒」(435a1, 438c12, 470a27, etc.)

〈T626〉「摩休勒<sup>†</sup>」(389a13, 397b6, 398a18)

〈T624〉「摩休勒」(359b17, 364a4, 366c29)「摩睺勒」(349b11)

両訳語ともに、他の支識訳経中、後世の訳経中で比較的広く確認できる音訳語である。

(29) *yakṣa*

閻叉 (T224 429c19ff, 435b1, etc./T626 389a12, 397b6, 398a17, etc.)

(30) *Rājagrha*

羅闍祇 (T224 425c4, 478b9/T626 389a7, 399c14)

<sup>30</sup> 『阿闍世』の用例については異訳の対応箇所には相当する言葉はないが、*preta*の音訳語であると見て差し支えなからう。

<sup>31</sup> Nattier [2005] 参照。「持佛威神」は『兜沙經』『般舟』『侘眞』といった支識訳経で確認される。そのほかには『道行』の影響を受けた『大明度經』(T225)『鈔經』(T226)などに複数確認される他は、數經典に1例ずつほどしか見られない稀な訳語である。

<sup>32</sup> 「發好心」は『阿闍世』以外では失訳『大乘悲分陀利經』(T158) 惠簡訳『佛說懈怠耕者經』(T827)で見られる。

〈T626〉「羅闍國」(396a4, 402c21)

〈T624〉「羅闍城」(364a19)

両経の間で「羅闍祇」という音写語が確認された。『阿闍世』中で確認された「羅闍國」という語は、『般舟』で「羅闍祇國」が見られることから「祇」が脱落したものである可能性と、『佉真』の *grha* の部分のみ意識した「羅闍城」に類するものである可能性の二つが考えられる<sup>33</sup>。

(31) *rūpa, vedanā, saṃjñā, saṃskāra, vijñāna*

色・痛痒・思想・生死・識 (T224 426a19ff, 437a14ff, etc./T626 391b8, 398c12, 401a15)

(32) *Śakro devānām indrah*

釋提桓因 (T224 429a11ff, 430a28ff, etc./T626 400a10, 405c24)

(33) *Śākyamuni*

釋迦文 (T224 431a10, 443b15, etc./T626 391b29, 392b12, 393a5, etc.)

(34) *saṃnāha-saṃnaddha*

僧那僧涅 (T224 427b29ff, 429b6, 452c17ff/T626 389b8, 390c4, 403c23)

(35) *sarvajña*

薩芸若 (T224 426a24ff, 427c16ff, 428c1ff, etc./T626 389b8, 390c5ff, 395b9, etc.)

〈T626〉「一切智<sup>†</sup>」(389b5, 391b6ff)

支識訳では「薩芸若」と音訳されることが一般的で、『般舟』等でも確認される。『阿闍世』では、後世の訳経で広く見られる「一切智」という訳語が確認されるが、他の支識訳経中では『般舟』の散文部分 (T418 904a) で 1 例確認できるのみで、支識訳経中では珍しい用例である。

(36) *sarvasattva*

一切人 (T224 429a3ff, 443a23ff, etc./T626 389a14, 390b29, etc./T624 350a21ff etc.)

一切 (T224 461c13/T626 389b14, 389b27, etc./T624 350a6ff, 350b26)

〈T224〉「十方天下人」(427b18, 464c24, etc.) 「十方人」(464b26ff, 465b16ff, etc.) 「一切人民」(433c19, 436b5) 「薩和薩」(433a7ff, 458b27ff, etc.)

〈T624〉「十方天下人」(357a27ff) 「十方人」(356b25ff, 358b27ff, etc.) 「一切人民」(356b3, 357b6ff, etc.)

『阿闍』を除いた支識訳経中では「衆生」という訳語が使われない<sup>34</sup>。 *sarvasattva* の訳語としては、3 経間で共通してみられた「一切人」「一切」などが用いられている。『道行』『佉真』で共通している「十方天下人」という訳語は漢訳経典全体でも用例が限られ、支識訳に特徴的な訳語の一つである<sup>35</sup>。

<sup>33</sup> ただし、「羅闍城」は後代の訳経には広く用例を確認できるが、「羅闍國」の用例は限られる。「羅闍國」は、祇多蜜\*訳『寶如來三昧經』(T637)に複数確認される他は数経に 1 例ずつのみ確認されるのみである。

<sup>34</sup> Harrison[1993] 参照。『阿闍』で「衆生」という語が見られることが、支識訳でないことの根拠の一つとして挙げられている。

<sup>35</sup> Nattier [2005] 参照。「十方天下人」は両経以外の支識訳では『摩尼寶』がある。原語の広い用例に比べれば、漢訳経典全体でもこの訳語の用例は限定的である。

## (37) Sumeru

須彌 (T224 465c22, 467a2ff, etc./T626 398a10, 404a16)

以上のように37の術語に関して検討を加えてきたが、『道行』と『阿闍世』の間では共通する訳語が多数確認された。特に、(1)「阿耨多羅三耶三菩」(5)「漚憇(和)拘舍羅」(11)「遮迦越羅」(27)「摩訶衍」(34)「僧那僧涅」(35)「薩芸若」などの支識訳を特徴づけると考えられる音訳語が共通している<sup>36</sup>。

けれども一方で、両経間で相違する訳語が少なからず見られた。まず、『道行』には見られないが『阿闍世』では確認できる訳語については、表1のとおり。

表1 『道行』には確認されなかった『阿闍世』の訳語

	訳語	意識	『侘眞』	他の支識訳経	後世の訳経
1	無上平等道意	○	—	—	▲
2	無所従生法忍	○	○	—	○
	無所従生法樂忍	○	○	—	▲
6	迦羅蜜		○	『問署經』	▲
7	眞陀羅		○	『阿闍』『般舟』	○
10	迦留羅		○	『阿闍』『般舟』	▲
11	金輪王	○	—	—	○
13	恒薩阿竭		○ / 恒薩	—	(未)
17	施與	○	○	—	(未)
18	提和竭		○	—	▲
19	明經	○	○	—	○
22	五旬	▼	○	『摩尼寶』	▲
25	發菩薩心	○	○	—	○
	發菩薩意	○	—	—	○
	發好心	○	—	—	▲
28	摩休勒		○	『阿闍』	○
35	一切智	○	—	『般舟』	○

(注)「意識」欄での○は「完全な意識」を、▼は「音訳と意識の混淆」を表す。『侘眞』欄での○は「用例が確認されること」を表す。「後世の訳経」欄での○が「広範に用例が確認されること」、▲は「用例がかなり限定的であること」、(未)は「調査が行き届いていないこと」を表す。

表1に見るように、『道行』と共通しない訳語の多くは『侘眞』と共通、または類似していることは注目に値する。また、『侘眞』を除いた、他の支識訳と共通しない訳語が多く、また、共通する場合でも、支識訳であることに問題がある『阿闍』や『般舟』と共通する例がいくつか見受けられる。

一方、『阿闍世』では、『道行』で確認される支識訳特有とされる訳語のいくつかが見られなかった。具体的には、(2)「無所従生法樂」(17)「檀・尸・羸提・惟逮・禪・般若」(24)「持佛威神」(36)「十方天下人」などである。

<sup>36</sup> また、一般的な訳語であるので上記では触れなかったが、音訳された固有名詞についても両経の間で共通するものが多く見られた。具体的には「舍利弗」「阿難」「彌勒」「目犍連」「摩訶迦葉」「須菩提」などの固有名詞も両経間で共通して見られた。

『阿闍世』における術語の訳語の調査からは、『道行』と共通する訳語が多数見られた一方で、両経の間で相違する訳語が少なからず見られ、訳語の上からでは『阿闍世』が支識訳か否かの判断は難しい結果となった。

## 6 まとめ

以上、訳語に関する調査を中心に、いくつかの観点から『阿闍世』の漢訳者に関する検討を行ってきたが、最後に以上の検討をまとめてみる。

諸経録の記述（第3節）や句作り、偈頌のないこと（第4節ⅠとⅡ）、そして術語の訳語の多くが『道行』と共通すること（5.2）については、『阿闍世』が支識訳であることを支持するものである。一方、冒頭句や割注の存在（第4節ⅢとⅣ）、『道行』と相違する一部の訳語（第5節第2項、表1）といった諸事項は、支識訳であることに疑義を持たせるものである。これら矛盾する諸事項同士からは、『阿闍世』が支識による翻訳か否かの判断にはわかにはくじがたい。ただ、このことは同時に、従来のように単に経録の記載内容にのみ基づいて、『阿闍世』を他の支識訳と同列に扱うことに問題があることを意味する。従来の研究においても同様の問題を指摘するものはあったが、本研究においては、訳語という、より確かなレベルでそのことを検証した<sup>37</sup>。

また、一方で、冒頭句や割注の有無（第4節ⅢとⅣ）など形式上の特徴の点で共通点を持っていることが知られていた『佉真』とは、『道行』には見られない訳語のいくつかについて、共通することが明らかになった（第5節第2項、表1）。また、すでに Harrison [1992] でも指摘されているように、AjKV と \**Drumakinnararājaparipṛcchāsūtra* の間では、内容面でも関連性が見いだせるものとなっていることは興味深く、これら両経典は翻訳事情に関しても何らかの共通点があった可能性も考えられる。残念ながら、本稿では紙数等の関係で、訳語などの『佉真』個別の翻訳上の特徴については十分検討できなかったが、それらを踏まえたうえで、『道行』を交えた三経典の翻訳上の関係やその背景などの考察については別稿を期することとする<sup>38</sup>。

## 〈略号〉

T 大正新修大蔵経.

## （参考文献）

Harrison, Paul.

[1990] *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present*, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

[1992] *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra, A Critical Edition of the Tibetan Text*, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

<sup>37</sup> 「従来の研究」とは具体的には Nattier [2006] を指す。脚注5参照。

<sup>38</sup> 本稿脱稿後、筆者は『佉真陀羅所問如來三昧經』の漢訳者について（『仏教文化研究論集』第11号、2007年3月刊行予定）と題して、『佉真』における訳語など翻訳上の特徴を分析・検討し、さらに『阿闍世』『道行』をあわせた、三経典の翻訳上の関係について考察する機会を得た。『佉真』に関する検討についてはそちらの論文を参照していただければ幸いである。

『阿闍世王經』(T626)の漢訳者について

- [1993] “The Earliest Chinese Translations of Mahāyāna Buddhist Sūtras: Some Notes on the Works of Lokakṣema”, *Buddhist Studies Review* 10, pp.135–277.
- [1998] “Women in the Pure Land: Some Reflections on the Textual Sources”, *Journal of Indian Philosophy* 26, pp.553–572.
- Nattier, Jan.
- [2005] “The Proto-History of the *Buddhāvataṃsaka*: The *Pusa benye jing* 菩薩本業經 and the *Dousha jing* 兜沙經”, 創価大学国際仏教学高等研究所年報 8 号, pp.323–360.
- [2006] “The Names of Amitābha/Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations (1)”, 創価大学国際仏教学高等研究所年報 9 号, pp.183–199.
- Zürcher, Erik.
- [1992] “A New Look at the Earliest Chinese Buddhist Texts”, *From Benares to Beijing: essays on Buddhism and Chinese religion in Honour of Prof. Jan Yün-Hua*, ed., Shinohara, Koichi and Schopen, Gregory, New York, pp.277–300.
- 河野 訓 [2006] 『初期漢訳仏典の研究 — 竺法護訳を中心として — 』, 皇學館大學出版部, 伊勢.
- 平川 彰 [1989] 『初期大乘仏教の研究 I』, 春秋社, 東京.
- 村上 真完 [1994] 「阿闍世王經」, 『文殊部經典 1』(新国訳大蔵経 ⑨), 大蔵出版, pp.36–89 & pp.249–350.

2006.12.15 稿

みやざき てんしょう 東京大学大学院博士課程